教区御遠忌テーマ
今、いのちがあなたを生きている
流罪からの出発
-私はどこで生きているのか-

高田教区報

響流

第121号

発行所
上越市寺町2丁目24-4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　杉本了恵
印刷　文化印刷㈱

東北地方太平洋沖地震により被災された方々に対し哀心よりお見舞い申し上げます

高田教務所長　**杉　本　了　恵**

このたびの震災、直接的には津波によってか、数多のいのちが逝き、多くのものが無くなってしまった。黒い津波。押し流される船、車、家。立ち上る黒煙と炎。自分の一番安心できる場が破壊される様子に、涙する少女。お姉さんだろうか、その子をそっと抱きしめる。そうした映像に、想いは筆舌に尽くし難いが、あえて文字にするなら「悲しい」であろうか。

その一方で、原子力発電所の事故によって初めて知ることも多かった核にまつわる危うい諸事。そして、そのうえにあった私たちの危うい「あたりまえの生活」。津波の規模が想定外（何を想定していたのかはわからないが）であったとしても、まさに命がけで放射能拡散を食い止めようとしている方々に感謝しつつも、やりきれなさを感じてならない。

でも私は、こうした「悲しみ」や「やりきれなさ」を繰り返し感じてきたはずなのだ。阪神・淡路大震災、チェルノブイリなどによって。いいえ、そうした大規模な災害でなくとも、毎年の台風が、大雨が、二年つづきの大雪が…

私は少なくとも、自然がもたらす恩恵と脅威を知っている。知っているにもかかわらず、あたりまえの生活にあっては恩恵を喜ぶことはあっても、脅威そのものには忌避感さえ抱かない。「あたりまえ」の持つ罠を疑うことがないのだから。

だから、今回の震災や原発事故について考えるとき、これは自然がもたらした現実であり、結果であり、問いは人間へと向けられていることを、はっきりしなければならないと思っている。そうでなければ、おそらくは自然を支配することにのみ心奪われ、自身を、生活を問うことなどないのであろう。

宗門は、宗祖御遠忌第二期・第三期法要の厳修を決定した。被災された方々の悲しみに寄り添う。いつまでも、どこまでも寄り添う。心がはれることなどないのであろうが、その想いのまま、御遠忌をお迎えしたい。そして、「無明長夜の燈炬なり」（念仏のみ教えは、長い長い無明の闇夜を破ってくださる灯火なのだ）とのお言葉をかみしめたいと思っている。

東北地方太平洋沖地震にともなう教区の動き

高田教区の救援金勧募

去る三月十六日、高田教区緊急事態対策委員会を開催しました。救援金については、すでに宗派（東本願寺）において救援金口座が設けられていますが、高田教区として独自に災害救援金を勧募していくことを決定し、各組長・組門徒会長への説明を経て、左記のとおり各寺院に救援金勧募を依頼しました。

皆さまには、どうか精一杯の募金をよろしくお願いします。

1　第１次救援金の集約期限
　　2011年６月30日㈭
2　救援金受付窓口
　①　高田教区内の寺院（所属寺院）
　②　高田別院
3　寄託先　真宗大谷派
　寺院で勧募した救援金の全額を、高田教区からの支援として取りまとめ、宗派に寄託した後、宗派の救援金として被災地に届けられます。

「高田教区震災支援有志会」が救援活動を始めました

教区内若手僧侶が「高田教区震災支援有志会」を立ち上げ、救援活動を行っています。

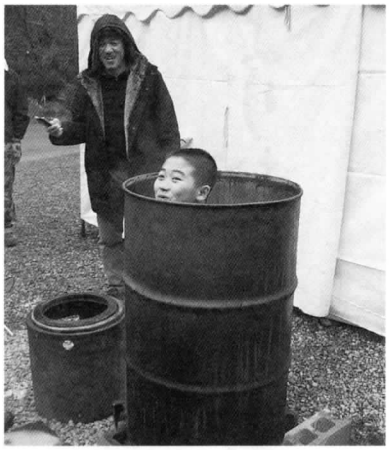
さる、四月九日・十日に、寺院から拠出された救援物資をトラックに積み、被災地で救援活動を行ってきました。その状況について、代表の金子光洋氏（第六組最賢寺）より寄稿いただきました。

高田教区震災支援有志会代表
金子　光洋

四月九、十日と今回の震災の被災地に行った行動メモ。

九日

早朝、高田別院を出発。昼過ぎに仙台教務所に到着。仙台教区駐在と話をした結果、積んでいる物資をそのまま石巻市まで運ぶ。（本堂には物資が沢山あったが、それを運ぶ人手が足りない様子だった。）


ドラム缶風呂（仙台仏青お風呂プロジェクト）

物資を運んだ足で石巻の市街地を視察。どんどん車や町並みが汚れていく。報道等では伝わってこない、想像を絶するような被害状況。空気と臭いを感じるとここまで違うのかということを痛感。途中、震災後から連絡をとっていた仙台仏青から電話があり、石巻の避難所で炊き出しとドラム缶風呂をしているとの報告があり合流。避難所にて仙台仏青の委員長と話をし、現状と今後の活動予定を聞く。避難所の人たちとの交流。その後、仙台教務所に戻り明日の打ち合わせ後就寝。

十日

早朝、仙台教務所を出発。気仙沼、陸前高田を視察。ここもまたその被害状況に言葉を失う。特に陸前高田は街が丸ごと無くなっており、メンバー全員の口から「どんな街だったのだろう」という声が思わず漏れる。その後、仙台教務所経由で高田別院に一九時頃帰着。

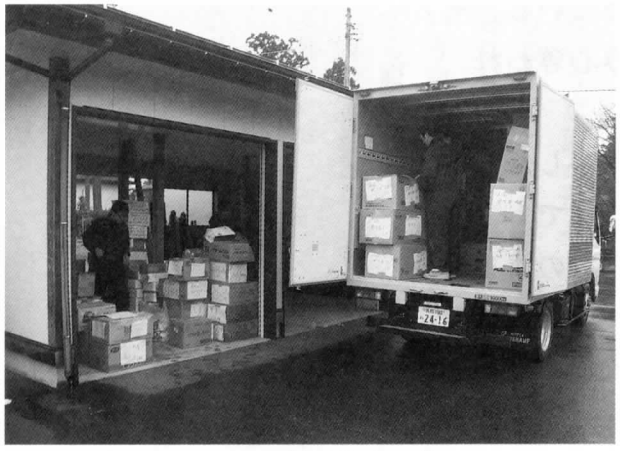
所感

今回は石巻、気仙沼、陸前高田の三ヵ所を視察した。その被害の大きさに対して言葉を失うばかりであった。そんな中、仙台仏青のメンバー一人一人が被災者であるにもかかわらず、支援活動に奔走している姿にはただただ頭が下がる思いであった。今後の支援のあり方を現地と連絡を取り合い考えていかなければならない。具体的には人的援助、金銭援助がウエイトを占めてくる。

一瞬にして多くのものを奪い去られた人達の心の傷の深さは現場に行ってもわからない。それでも現場に行かずにはいられない自分の気持ちは一体どこから出てくるのだろう。

心に残った言葉

「野次馬でもいいから来てほしい。そして野次馬で終わらないでほしい」


トラックに救援物資を積む

教区会正副議長就任挨拶

教区会議長

北條 賴宗

この度、一月十七日に招集されました臨時教区会に於きまして、教区会議長に選出されました。二期目ということで、まずはこれまでの皆様方のご協力に感謝するとともに、これからのさらなるお力添えをお願い致します。

さて、改めて申し上げるまでもなく、三月から五月まで「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」が勤まります。これまでの取組みの中で、それぞれの組・御寺院において団体参拝が計画され、いよいよ上山というところまでまいりました。

次に、「御遠忌讃仰事業」についてでありますが、阿弥陀堂の向かって右部分に、大欅・毛綱とともに今回作成いたしました「尾神嶽殉難のジオラマ」が展示されます。御遠忌にお参りいただきましたら、「宗祖越後御流罪八百年法要」のパネルとともに、是非とも御覧頂きたいと思います。本山へお参りされる皆様だけでなく、今回京都まで行くことの出来ない方々と共に、越後に流罪の身となり、そこから愚禿釋親鸞と立ち上がっていかれた宗祖のお姿に思いを致し、共々にこの御遠忌に出遇わせていただいた勝縁を喜び、さらに私達も真宗門徒として立ち上がっていかねばならないと強く感じています。

本山の御遠忌が勤められたその後には、「教区御遠忌」に向けての取組みが本格的に始まります。さらには昨年各組をまわらせていただき、御意見をいただきました「組及び教区改編」という難問にも、取り組んでいかなくてはなりません。

いずれも、これからの将来に関わる大事な問題であり、これまで以上に教区の皆様と課題を共有しながら進めていきたいと存じます。

皆様のご指導と、ご協力を賜り、その任を果たしてゆきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

教区会副議長

尾﨑 秀行

一月十七日に開催された臨時教区会において、ご推薦いただき再度、副議長の任に就かせていただくことになりました。

改めて前任期を振り返りますと、初めて経験することばかりで戸惑うこともありましたが、教区内はもとより全国正副議長会、連区正副議長会等を通じ多くの方々に出遇い、情報交換することが出来たことは私自身にとっても大きな収穫であったと感じております。

北條議長がイニシアチブを取る中、副議長の役割を模索しながら歩んでまいりましたが、その間皆様から叱咤激励を賜りつつ何とか前任期間を全うすることができたことに、まずもって感謝申し上げます。

副議長二期目を拝命した今、待ち受けている様々な課題を思うと、前回以上に身の引き締まる思いを抱くことであります。宗派の御遠忌後、教区御遠忌をどうお迎えするか、具体的に定めて行かなくてはなりません。この教区御遠忌は今後の教区の在り方、さらには両別院の在り方をも確かめていくという大きな課題を有するものであると考えております。また多くのご意見を賜っております教区及び組に改編についても確かな方向性を見出していかなくてはなりません。

教区の皆様と課題を共有し、決して見誤まることのなき道を選択して行かなくてはならないと痛感致しております。

さて、去る二月九日、本山にて全国正副議長会臨時総会が開催されました。全国正副議長会会長については、前回に引き続き金沢の坂本敏朗議長が就任、副会長には京都の竹内彰典議長が選出されました。我が北條議長も常任委員に推挙され着任されたことです。

新教区会も動き始めたばかりで、任期はあと三年余となりますが、教区の皆様の声に耳を傾けながら、北條議長と共に精進してまいる所存でございますので、何卒ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

この原稿は、三月上旬に寄稿いただきました

教区会議員選出される

任期満了（二〇一〇年十二月二十三日）に伴う選出教区会議員選挙が行われ、無投票により次のとおり決定しましたのでお知らせします。

なお、選出教区会議員に初めて就任された二名の議員の方に原稿をいただきました。

（任期：二〇一〇年十二月二十四日から二〇一四年四月二十三日まで）

南　智信（第6組光運寺）
尾﨑　秀行（第7組極生寺）
鈴井　祐昭（第2組常圓寺）
竹田　脩（第7組正念寺）
長尾　正示（第8組大嚴寺）
北條　賴宗（第6組照行寺）
岩崎　英宣（第11組専敬寺）
堀前　惠裕（第5組光源寺）
横田　力（第12組善德寺）
楠田　昌樹（第3組西性寺）
宮本　亮二（第13組榮恩寺）
小柳　学（第1組西光寺）

【届出順・敬称略】

新任教区会議員の挨拶

教区会議員になって

第六組光運寺住職　**南　智信**

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を迎える年に初めて教区会議員となりました。二〇一四年四月までの任期です。この任期中、与えられた任務は非常に重要だと認識しています。この御遠忌終了後三年をめどに教区・組の改編の方向を審議提示し、教区ならびに高田・新井両別院の御遠忌厳修の方向性も求められるでしょう。

宗門の動きに高田教区がどのように教化活動方針を見定め、各寺院が本来あるべき真宗門徒として信心の回復ができるか、議会審議の中で確認していこうと考えています。

寺院を取り巻く内外の環境を見ると寺院運営、後継者問題や無宗教化、直葬、インターネット墓参という形骸化した現状の社会情勢に真宗がどのように向き合い、教化事業を具現化し取り組むのか、御遠忌厳修後の十年間が重要な時期と見ています。

教区会議員として、できる限り審議を伝え聞き、各寺院の意見を届ける所存です。ご意見を賜りますよう宜しくお願いします。

新任挨拶

第一組西光寺住職　**小柳　学**

今年は、本山にて宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が厳修されます。全国、ご門徒ならび教区、各組と致しましても、重要な出遇いの始まりの年となります。

高田教区では、二〇〇七年に御流罪八百年の法要を厳修致しました。ここからもう御遠忌が始まっているという事を確かめ合ったかと思います。教区テーマ「親鸞の道を生きる」から始まり、「流罪からの出発―私はどこで生きているのか―」という問いに沿いながら「教区教化事業」「教区改編・組改編」といった、色々な案件に係って行けたらと思います。そのような、大切な時期に教区議員の中に入れて頂いた事に対しまして、責任と緊張の重圧を感じています。

新参者でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。　合掌

教区会の役員構成について

去る一月十七日招集の教区会（臨時会・組織会）において、次のとおり教区会正副議長、参事会員及び参事会員補充員が決定したのでお知らせします。

教区会議長
北條　賴宗（第6組照行寺）

教区会副議長
尾﨑　秀行（第7組極生寺）

教区会参事会員
菴澤　紹隆（第2組法圓寺）
楠田　昌樹（第3組西性寺）
堀前　惠裕（第5組光源寺）
桃井　正尊（第7組西蓮寺）
長尾　正示（第8組大嚴寺）
岩崎　英宣（第11組専敬寺）
宮本　亮二（第13組榮恩寺）

教区会参事会員補充員1
金子　正美（第6組最賢寺）

教区会参事会員補充員2
千名　哲爾（第13組最尊寺）

正副組長について

任期満了（二〇一〇年十一月三十日）に伴う正副組長選挙が行われ、次のとおり選出されたのでお知らせします。

（任期：二〇一〇年十二月一日から二〇一四年三月三十一日まで）

組長

第1組　黒坂　克己（寶光寺）
第2組　菴澤　紹隆（法圓寺）
第3組　高橋　良弘（正光寺）
第4組　江口　兼（西勝寺）
第5組　大道　智紘（智願寺）
第6組　金子　正美（最賢寺）
第7組　桃井　正尊（西蓮寺）
第8組　金山　世雄（泉光寺）
第11組　井上　博（福樂寺）
第12組　朝川　睦洋（教念寺）
第13組　千名　哲爾（最尊寺）

副組長

第1組　小柳　学（西光寺）
第2組　小山　了信（明通寺）
第3組　石井　浩順（淨念寺）
第4組　内山　順恵（養性寺）
第5組　安達　恩（流泉寺）
第6組　宜春　智正（勝念寺）
老野生常昭（本覺寺）
第7組　堀河　知行（専念寺）
関　英隆（淨善寺）
第8組　白鳥　顯雄（専長寺）
相模　悟堂（明善寺）
第11組　大滝　法円（圓重寺）
岩崎　修（稱專寺）
第12組　松浦　彰英（法西寺）
第13組　山崎　義文（本敬寺）
山田　和雄（願念寺）

センター活動報告

二月中旬までの連日の降雪と寒さで、雪質も上々の冬を過ごしてきたが、その後、さほど雪も降らず、昔から比べると冬の期間が確かに短くなってきたと感じたこの冬であった。

二月十五日より二泊三日の日程で、第二十三回センタースキー学校が開催された。

例年より参加者が少なかったのは残念だったが、二日目の杉ノ原スキー場のゲレンデから見えた、青空に浮かぶ白い富士山が、スキーヤーを楽しませてくれた。

また、三月五日の「雪に愉しむ池の平」は、「池の平青少幼年センター子ども報恩講」として初めて開催した。当日は、毎年恒例の「すのこぞり大会」を行い、また、今回から初めて、子どもたちの手形で打敷を作成し、その打敷を荘厳して報恩講のお勤めを行った。

報恩講のおつとめ

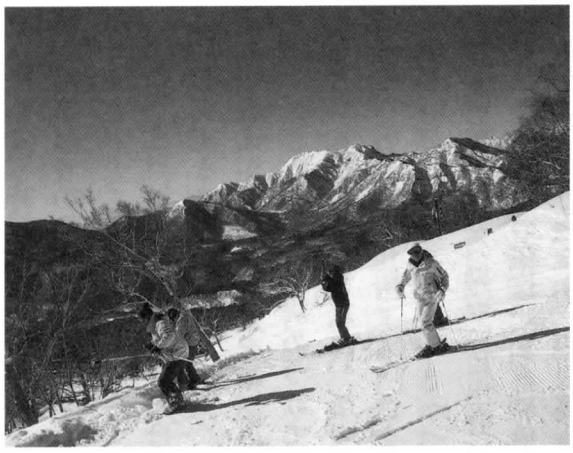
第二十三回センタースキー学校

学んだこと

第六組養福寺　**石黒　覚裕**

私は今回スキー教室に参加して初めてスノーボードを体験しました。スキーと同じく板で滑るスポーツなので簡単に滑れるだろうと思っていました。しかし実際に体験してみると難しく、板一枚あるなしでこんなにも違うものかと思いました。頭では重心移動はスキーと同じだと分かるのですが、体がなかなか思い通りに動かず何度も転びました。夜の懇親会の時に講師や経験者の方からコツを教えてもらい、最終日には自分でも驚くほど上達していて、スムーズにターンをできるようになっていました。

当初私はスノーボードをする人はちゃらちゃらした人が多いというイメージを持っていました。なので今までスノーボードをしてみたいと思ったことはありませんでした。しかし実際はそんな人はごく一部であり、私の価値観がいかに一方的かを思い知ることができました。私は常日頃いろんな角度から物事を捉えようと意識していましたが、まだまだ未熟でした。これからはより一層価値観に捉われずに、物事を客観的に捉えていきたいです。


快晴に恵まれた青空のもと

聞思学場 ―研修生意見発表―

聞思学場真宗本廟奉仕団研修を終えて

第六組善念寺　滋野　憲史

思えば、既に往路の車中からソレは始まっていたように振り返る。

流通分（後序）による親鸞の名告りを、井上円室長の元、確認していた車中。編年体で書かれる「愚禿釋の鸞」から「名の字を書かしめたまい畢りぬ」あたり（他にも幾つかあったが…）を座談・攻究していた。

攻究とは、字の通り「せめきわめる」ということだが、そこには「せめみがく」という意味が含まれていると、第一期特別研修生制度で既に聞いていた。がしかし、磨かれるということが、座談・攻究において成り立っているのだと、今回の聞思学場真宗本廟奉仕団研修において痛感させられたのだ。

具体的には、聞いたことを口にすることにより、自身で言葉を選び、そこには思いもつけ足されて質疑し、確認するのだが、反論とは言わないまでも「それがどういうことなのか？」・「自分にとってどういうことなのか？」を室長や研修生同士に問われると、殊更に聞いてきたことを思い起こし、その背景を思い浮かべ、さらに自分の思いが削ぎ落とされている感じを受けたのだ。仏具のおみがき同様に、「これで良し」と言うことがなく、まさに研磨されていたことを実感していた。

『蓮如上人御一代記聞書』によると、

山科にて御法嘆の御座候うとき、あまりにありがたき御掟どもなりとて、これをわすれもうしてはと存じ、御座敷をたち、御堂へ六人よりて談合そうらえば、面々にききかえられそうろう。そのうちに四人はちがいそうろう。大事のことにて候うともうすことなり。ききまどいあるものなり。（『真宗聖典』八六四頁）

また、『蓮如上人御一代記聞書』に、

蓮如上人、仰せられ候う。「物をいえいえ」と、仰せられ候う。「物をいわぬ者は、おそろしき」と、仰せられ候う。「信不信、ともに、ただ、物をいえ」と、仰せられ候う。「物を申せば、心底もきこえ、また、人にもなおさるるなり。ただ、物を申せ」と、仰せられ候う由候う。

（『真宗聖典』八七一頁）

また、『蓮如上人御一代記聞書』に、

前々住上人、御法談已後、仰せられ候う。四五人の御兄弟へ仰せられ候う。「四五人の衆、寄り合い談合せよ。必ず、五人は五人ながら、意巧にきく物なり。能く能く談合すべき」の由、仰せられ候う。

（『真宗聖典』八七七頁）

また、『蓮如上人御一代記聞書』に、

「一句一言を聴聞するとも、ただ、得手に法をきくなり。ただ、よく聞き、心中のとおり、同行にあい談合すべきことなり」と云々　（『真宗聖典』八七九頁）

と、座談・攻究によって、自分勝手に聞いていたり、聞き違えていることを確認する大事な場であることを今更ながら思うと同時に、蓮如上人が再三再四戒められていたことに改めて気付かされるのだ。

勿論、『蓮如上人御一代記聞書』に書いて在ることは既に知っていたが、そのことの重要性を一楽真教導より、さらに露わにされてきたのだ。

ソレは物語としてではなく、「いつでも・どこでも・だれでも」に開かれてくる、時機純熟としての、釈尊と阿難尊者の会座ではなかったかと知らされたことである。

「真実と言いますが、真実とは、真にして実なる弥陀の法（道理）であり、教えが我が身に実を結ぶのです。」とのお話しに、決めつけてゆこうとする私・賢ぶる私に、愚者に帰らせ、引き戻す作用・方向性をお聞かせいただいたことだ。

阿難尊者が自分の勘違いに出会い、破られてゆくその様は、まさに仏法聞き難しなのであろうし、釈尊と阿難尊者がそうであったように、また法然上人と親鸞聖人がそうであり、また親鸞聖人と唯円もそうであるように、言葉がソレと直結させるのであって、むしろ自分の判断基準で人を見る私において、どうして仏を見ることができようか！　と、叱咤されたようである。

仰せによって呼びかけられ、勧めを証してゆく一人の私が、南無阿弥陀仏と応えてゆく歩みを求められた研修であったと今更ながら振り返る。ソレは人との出会いを通じて、言葉によって諸仏が垣間見せる具現化された作用のようだった。

ソレは時に言葉となり、その言葉を語った者を諸仏と為さしめ、そし

てさらにソレは、同時にソレと私を直結させる。

ソレは常に在り続け、いつでもない今、どこでもないここに、誰でもない私に、言葉と成って世界を変えて見せてくる。

手垢や思い計らいを破るカタチで…。

聞思学場での学びと課題

第十一組高源寺　春日　智昌

聞思学場では三年間「正信偈」について学んでいます。毎月の講義のほかに年に一回池の平にて一泊研修が行なわれます。

初年度の一泊研修では、「自分の課題を明確にする事はとても大事で必要である。」ということで、研修生全員がお互いに課題を発表しました。

二年目の一泊研修では、法話実習が行われ三名の研修生が法話をしました。一日で三名の法話を聞くことができるのは、聞思学場ならではの事だと思います。自分の課題を発表した時もそうでしたが、研修生が法話をした後で三人の法話を受けての座談会が始まり、それぞれの考えや思いを語ったり、話を聞く事で、共に考え教えを聞いていくという環境ができていきました。

最終年度である今年度は、同朋会館にて本廟奉仕団としての研修でした。私自身は十数年ぶりの上山であり教導は大谷大学の一楽先生という事で楽しみにしていました。今回の研修でも法話実習があり私も久しぶりに法話をしました。法話実習の後には、いつもの座談会が行なわれました。

その時の事です。私が補導にするどい質問をされ返答に困っていると、他の研修生に手助けしてもらったという事があり、私が伝えようとしている意図を理解している仲間がいる事、共に学んでいる場に身を置いている事を実感することができました。

そして、私自身が親鸞聖人の教えを聞いて、どのように受けとめたのかを自分の言葉で伝えていきたいという課題に気付く事もできました。

一楽先生は、講義をはじめる前に「私が教えを聞いて、どのように受けとめたかを話します。」と言われました。私も一楽先生の講義を聞いて、どのように受けとめたのか、この場を借りて考えてみたいと思います。

「正信偈」は『教行信証』の行巻にある偈（うた）です。親鸞聖人は「正信偈」の偈前の文で、

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく

（『真宗聖典』二〇三頁）

と述べられています。

親鸞聖人が釈尊の真実の教に出会い浄土の祖師（七高僧）が書かれた論や釈を熟読し、念仏の教えに出会う事ができた感動を示しておく必要があったのだと思います。

また総序では『教行信証』を制作した理由がのべられ、長い年月をかけて親鸞聖人が浄土のあり方や生きた教えに出会う為の方法や出会った事への感動を伝えたかったのではないかと思います。

後序においては、なぜ書かなければならなかったのかといった事由が書かれているとも思います。

総序と後序は、学生時代に何回も拝読し、暗記した部分です。

新たに考えてみると、念仏の教えが届いているもの以外に念仏の弾圧によって流罪になった事で、弾圧した者にも読ませたいと、書かずにはおれなかったという意志の表れではないかと思います。

このことは

聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり。

（『真宗聖典』三九八頁）

と言い切られています。

私なりに言うと「念仏の教えが我身の真実を確かめ、生きてはたらいているのだから心配しないでいいのですよ」という親鸞聖人からの呼びかけではないかと思います。諸仏のはたらきに気づかず迷いにふりまわされている私に、迷いを超えていく方法や道筋を行巻で親鸞聖人は明らかにされ、最後に偈として「正信偈」をまとめられたという事が今回の研修でわかりました。

今回の上山研修では、同じ教えを学び、うなづける仲間がいる事を確認する事ができました。

今後も教えを聞き、受けとめた事を自分の言葉で表現できるように研鑽していきたいと思います。

念仏と宗教

第六組長圓寺　渡部　秀明

「聞思学場」にて学ばせて頂いている事、日頃感じている事を書いてみようと思います。

私はお寺に育ちました。何か事が在る毎に「本堂にお参りします」と父に言われました。本堂に家族で並んで、仏前で手を合わせた時等、「ナマンダブ、ナマンダブ」と節目節目に父が念仏するのを聞いて、老人くさいと感じていました。当時の私には、お念仏は、住職かお年寄りが称えるものと言うイメージがあり、声に出して称えるのは何だか気恥ずかしく、抵抗がありました。格好悪いという思いがあったのです。おそらく若い人は、念仏に対してそういう感覚を持っているだろうと思います。あるいは、念仏を、迷える霊に成仏を促す為の呪文の様に勘違いしている人も多いかもしれません。または、願い事をする時の呪いの言葉と言う誤解もあるかも知れません。でも、念仏はそう言うものではありません。

南無阿弥陀仏を分解して意味を解説すると、「南無」は「帰依する、おまかせする」と言う意味で、私の人生の拠り所と仰ぐ事を言います。「阿弥陀」は「量る事が出来ない」と言う意味で、「無限の空間と時間」「無限の智慧と慈悲」を指します。「仏」は「如来」と同じ意味で、「真如より来たれるもの」を言います。真如とは、この世界の真実、時代と場所を越えた尊い道理、悟りです。ですから、南無阿弥陀仏と言うのは、真如の仏さまを私の人生の拠り所と仰ぎますという意味なのです。南無阿弥陀仏には、阿弥陀如来の、私を悟らせたい、迷いから救いとりたいと言う願いと、仏さまの行が凝縮され、込められています。そして、私が「南無阿弥陀仏」と称えるのは、「阿弥陀さまの願いが私に届きました。有難う御座います」という報恩感謝の意味が込められていると習いました。南無阿弥陀仏は仏さまとの交信の言葉です。人から呼ばれたら「はい」と返事をする様に、仏さまから、私を救いたいと言うお心を受け取ったら、私は「南無阿弥陀仏」と返事をする。そう教えられた時から、念仏に対する気恥ずかしさは無くなった様に思います。

他力本願と言うと、世間一般では「自主努力の放棄」「人の力をあてにする」「人の言う事を鵜呑みにする」と言う様な意味に誤解されています。しかし、仏教で言う他力本願は、そういう意味ではありません。他力本願とは、仏さまの力、仏さまの「私たちを目覚めさせたい、悟らせたい」と言う願いを意味します。決して、努力せずに人任せにすると言う事でも、棚からぼた餅を願うと言う意味でもありません。他力は、よく海に譬えられます。人生の荒波を泳ぐのは私自身ですが、私を包んで支えているのは、海の力です。自分の力だけを過信して、もがいては、苦しみ沈み、溺れるばかりです。その時、私を包み込む海の力に気づいて、ふっと力を抜く、海に委ねると浮く事に気づく。その上で、海の力に感謝しながら、安心して楽に泳いで行くのです。海の浮力の様な、私を支えて下さる仏さまの力、仏さまの願い、お陰さまの力を、他力本願と言うと習いました。仏教において信心の要となる大切な言葉ですと教わりました。だから、人任せの意味で使われるのは悲しい事です。

では、宗教って…。己の心を問題にせず、願い事をすれば、悩みが解消されると言うのは、真理に反する教えです。「教祖に、霊感、超能力があり、病気を治す。未来を予言出来る。悟りを得ており、お釈迦様や神と交信出来る。」等と聞くと疑問を感じます。仏教の宗祖、高僧の方々は、謙虚です。己を厳しく見つめた、本物の謙虚さです。偉ぶる事も、能力を誇示する事も皆無です。仏教の高僧方は、誰一人、「自分に力がある」等とは言われていません。「人間に真実はない、仏さまだけが真実である」と、ただ謙虚に仏法を説かれるのです。だからこそ、本物だと感じますし、尊敬し、頭が下がるのです。

お釈迦様は、この世の現実のあり方、真実・法を説かれました。人間世界を生きるのに、欲のままでは思い通りにならないと。思い通りにならない事が真理なのだと。自分の身に辛い事が起こると、人・社会あるいは霊・祟りのせいにしてしまうのです。そして、願いを叶えてもらおうと、仏さままで利用しようとするのです。そして、思い通りにならないと、「神も仏も」と悪態をつくのです。仏さまは真如です。この世の法則から外れ、あなたの望みだけを聞き入れる訳にはいきません。この世は、その場、その時の複雑に絡み合った縁によって、色々な事態が起こるのです。その人が道徳的に何も悪く無くても、災害、事故、事件に

遭遇する事があるのです。そういう危ういこの世の現実の中に、私は今、たまたま生かされて生きているのです。人間が考える、人の運、不運も、人それぞれの価値観や心の持ち様で変わります。己から見て、幸せそうな人を羨み、妬んだ所で、私の現実は変わりません。しかし、そんな私の心に、仏さまの価値観、仏さまの心が入った時、今この現実の私の身のまま、生きるのが少し楽になるのです。私には、私のこの世での役割があるのです。私なりに、この世をしっかり生きる事。そう教わり、そう考える事で今を生きています。

三年間の学びを通して思うこと

第五組覺真寺　藤戸　真史

私は今から三年程前、高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」という教学研鑽の場が開かれると聞き、その一員として学びの場に参加させて頂いております。そして、いよいよ三年間という一つの区切りを迎えようとしております。この三年間を通して、今自分自身が何を課題としているのかを述べたいと思います。

そもそも、なぜ教学研鑽の場である聞思学場に参加しようと思ったのかということを、今思い返してみますと、自分自身がいかに勉強不足であるかということにあったと思います。私は大谷大学で四年間、そして大谷専修学院で一年間学びました。そして自坊に戻り、法務に携わって今日にいたっております。そんな中、ふと『真宗聖典』を開きながら勉強することがなくなっていることに気が付いたのであります。法務や新しく始まった日頃の生活に早く慣れようとしていくあまり、教学という非常に大切なことを置き去りにしている事実に気付いたのであります。

そうした自身の不勉強さにあせりと不安を覚えたことをきっかけとして、参加させて頂くことになったのが、聞思学場という場であります。井上室長の講義、講師の先生方の講義を聞き、先生方を含めたメンバー全員での座談会を通していく中で私が痛感したことは、やはり自分がいかに不勉強であるかということ、そして自分がいかに本当は分かっていないことを分かったつもりにしていたのかということであります。自身も学び、一通り意味が分かっているつもりであった「正信偈」も、違った角度、あるいはもっと掘り下げて親鸞聖人がどうしてこの言葉、言い回しをされたのか、そして自分が勝手にこういう意味だろうと思い込んでいた、つまりは間違った解釈をしていた所など、様々な私がまるで分かっていなかったことを、先生方や他のメンバーの方々から教えられました。

こうした本当はわかっていないのに分かったつもりになっていると思い知らされたのは、教学ということだけではありませんでした。今現在、自坊では、九日と二十八日の月二回の定例会を開いています。そしてその定例会において、様々なテーマで話をさせてもらう機会を与えられております。仏法にご縁を持って頂くことを願って開かれる場において、いったいどんな話をすればよいのだろうか、少しでもみなさんに聞いて頂けるような話が自分はできているのだろうか、そもそも自分が話しているのは仏法なのか、世間話ではないのか、こんなことを考えるのも教化者意識と呼ばれるものなのか、などなど、多くの疑問、悩み、葛藤が尽きることはありません。にも関わらず、時間が経過し、回数を重ねていく中で、わいてくる疑問、悩み、葛藤に蓋をし、それらを感じないように、そして忘れようとする自分がいるのであります。他にも月参り、あるいは法事、葬儀等の法務に関しても同じであります。多くの悩み、葛藤があるにも関わらず、それに蓋をして見ないようにしてしまう、自分の中で「分かった」というバリアを張って、本当はまるで分かっていないことを分かったこととして、逃げようとしている自分がいることに気付かされたのであります。

教学研鑽ということは、自分が真宗の教えを聞き続けていく、ということであると思います。しかし、「分かったつもり」にしていくということは、自らその耳をふさいで、聞こえないようにしていくことに他なりません。かつて聞思学場において言われた「自分はなぜ真宗を求めているのか、何を求めて真宗を聞こうとするのか、そこを自らの中で明確にしなければならない。」という言葉が、とても耳に残っています。このなぜ、そして何を求めるのかということは、言わば出発点ともいえる根本的なことだと思います。しかし、根本的なこの一点がグラついているからこそ、逃げようとするのだと思います。聞思学場で学んでいく中で、そうした自らの出発点ともいえることの不確

かさが浮きぼりになってきたと思うのです。

僧侶のつとめとは一体何か、そして何より自分にとって真宗とは何か、何を求めているのか。これからずっと問い続け、自らの課題としていく大切な問題であると思います。常に悩み、常に葛藤し続けていく。それこそが、今の自分にとっての大きな課題であり、自らが僧として歩んでいくということなのだと思うのであります。

参加者のひろば

児童冬の集い

はじめてセンターでスキーをして

第六組善念寺　小一　**滋野　智尋**

はじめはこわかったけど、ぼうげんヘルパーをつかってすべったらかんたんでした。うし木先生はやさしかったので、スキーをすべるのがたのしかったです。リフトのとき、うし木先生が「下を見るとこわくなるよ。」といってくれました。じょうずだったからうし木先生が「じょうずだね。」っていってくれました。スキーがじょうずにできてよかったです。

よるは、まりちゃんと二人でおふろに入りました。たのしかったけど、とうとうかえることになりました。また、おにいちゃんとスキーできょうそうしたいです。まりちゃんとあそんだりしたいです。

児童冬の集いに参加して

第十一組高源寺　小一　**春日　真梨**

私はじどうふゆのつどいにはじめてさんかしました。おとうさんと、センターへ、いく車の中で、女の子のともだちがいるのかなあと、ふあんでした。センターのうけつけでもらったしおりを見たら、しってるともだちの名まえがかいてあったので、ほっとしました。

かいかいしきをしてから、グループに、わかれてスキーにいきました。一かいしか、すべれなくてつまんなかったです。でも、おともだちをまっているとき、いけべいがいて、しゃしんをとってもらいました。センターにもどって、きがえたらおつとめをしました。ゆうしょくはカレーでした。かたづけたら二かいの大ひろまでゲームをしました。いちばんおもしろかったのはせんちょうさんのめいれいのゲームです。

二日目のあさは、さいしょにおつとめをしてあさごはんをたべました。スキーでは、天気がよくてきもちよかったです。先生やおとうさんは「じょうずになったね。」とほめてくれました。らい年は、ともだちもさそってさんかしたいです。

児童冬の集い

同朋唱和講習会

「同朋唱和」講習会に参加して

第十三組惠光寺門徒　**廣瀬　和美**

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の最後の講習会である「御遠忌同朋唱和（緑本）」講習会に参加いたしました。

講習開始時には、ほとんど寺族関係者で、我々門徒は皆無に近い状況の中で、声明講習が始まりました。

「正信偈―草四句目下」日常では自己流で少しは理解していたつもりでしたが、声明講習が進むにつれ集中力の欠如、思考力の低下も重なり自己流の理解力、発声では何も通用するものがないことを、この場で痛切に感じました。

今回の声明講習で改めて「正信偈」の奥の深いところがより鮮明になりました。

今後は初心にかえって、今迄以上の聞法求道に精進しなければ通用しないことを、この講習会を通じてよくわかりました。

今回の宗祖親鸞聖人七百五十回御

遠忌団体参拝の参加を契機に、今後の聞法求道と自己研修の一助といたしたいと思います。

社会問題研修会

社会問題研修会に参加して

第六組善念寺　**滋野　康賢**

「うちの子って過食症？」

そんな不安から、この研修会に参加しました。

上越教育大学の増井晃教授は、滋賀県の精神保健福祉センターでの勤務経験もある、摂食障害の専門家です。

先生は大学生に様々なやせすぎから太りすぎまでの体型を見せ、平均値と自分の体型がどれであるかをアンケートしたそうです。その結果、男子は平均値も自分の体型もそれなりに把握していたものの、女子は全般的にやせ体型を標準とし自身の体型を太り気味だと認識していることが分かりました。

今の女性は「自分は希望していない太りすぎの体型である」と感じているのだそうです。

なりたい自分になれない
なりたくない自分になっていく

この自己否定の感覚が摂食障害へとつながっていくのだそうです。

摂食障害は、①他人に認められるために過度のダイエットをする「やせ願望」②体型の維持のため、水も飲めなくなる「肥満恐怖」③正しく自身(の体型)を見られない、「ボディイメージの障害」という、3つの要素があるといわれます。そして、こういった摂食障害を理解するためには、

①やせることを好む
②異常なほどやせている
③偏った食事をする
④無理なダイエットや、過食を補うために万引きをする

という、現象を見つけることが重要であり、それには

⑤家族の関係を密にする

ことが重要だと言われていました。

ここに「つながりを生きる」真宗との接点があると感じた研修会でした。

「摂食障害は食事に表れる
心の病気である」

参加者は数名で、それもわが子が摂食障害ではないかと心配する母親ばかりでした。（遠方からの参加者もありました。）

社会に開かれた研修会であると同時に、「社会の関心事が、寺院関係者の関心事と一致していない」という問題が見えた研修会でした。

ちなみに、うちの子は過食障害ではなく、ただの食べすぎだと言われ、ちょっと安心しました。

得度研修会

得度研修会に参加して

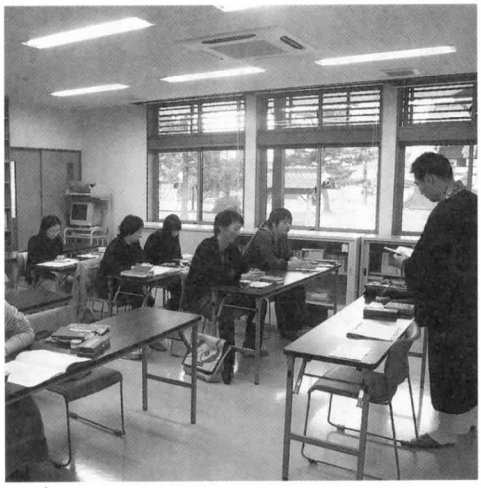
第一組光照寺　**梅澤　謙吾**

わたしにとって得度研修会に参加するということは、長年拒んできた「寺」という制度と妥協することを意味していました。思い浮かんだのは（否定的な意味の）諦念という言葉です。それは寺＝宗教から自由であること、都会で生活することを諦めることであり、無意識のうちに拘泥していた「自分」という生き方を諦めることでもありました。

その意味で得度研修会は、内面的には否定的な場所・時間であり、抵抗感は禁じ得ないものでした。しかし、同時にそれはわたしに与えられた外部の場所・時間でもありました。得度考査という目標が一種の強制力をもってわたしに働きかけてきたからです。そこには熱心な講師の方々や目標を共有する生徒の方々がおり、その流れに身を委ねることにある種の居心地の良さを感じました。

得度考査を終え、得度式を終えたいま、居心地の良さを忘れ、再び葛藤の日々が始まります。

最後にお世話になった方々に心より感謝申し上げます。



第八期 高田真宗学院卒業式・教師補任式

高田教区は、真宗大谷派の教師たる人材を養成する目的で、真宗学院を開院している。

この真宗学院は、三年間、毎週土日の夜間、高田別院において、真宗や仏教、また、声明作法などを学ぶため授業が行われ、さまざまな年代の方が学ばれている。通常の授業のほかにも、池の平青少幼年センターでの一泊研修や、本山での教師修練など、いろいろな研修が行われている。

去る、三月五日、第八期高田真宗学院卒業式及び教師補任式が執り行われ、十二名の学院生が卒業し、教師の補任を受けた。三年間という長期間の学びの場であったが、今回、二名の皆勤対象者があった。

今回、真宗学院を卒業した方のうち二名から原稿をいただいたので、下記のとおり掲載する。

また、同日、第九期高田真宗学院の入学試験も行われ、十名の新入学が決った。入学式は、来る六月四日に行われ、これから三年間学んでいく。

第8期 高田真宗学院 卒業式・教師補任式　2011年3月5日

三年間を通じて

第一組廣傳寺　**塩谷　良和**

ご縁あって「真宗」を学ぶ機会を頂き入学しました。

はじめは、不安ばかりが募りましたが、すばらしい仲間・講師の先生スタッフの方に恵まれ、不安もなくなりました。

その事が一番感じられたのが、前期・後期修練です。

前期修練では、金沢・名古屋教区の真宗学院生達と学びました。勉強内容も同じなので心配はしていませんでした。話しをしているうちにある事に気付きました。それは、高田真宗学院の講師の方々に親切・丁寧に教えていただいているんだということです。

後期修練では、専修学院の山科学舎の人達と学びました。毎日、真宗を学んでいる人達と一緒でしたので不安で不安でしょうがありませんでした。そんな時、三年間を共に過ごしてきた仲間の顔を見ると自然に不安も和らいでいきました。

お母さん的存在・兄弟的存在・友達的存在・ライバルとしての存在などいろいろな関係性の中で、みんなに助けられ、三年間乗り越えられたことに気付かされました。

何かのご縁で知り合った仲間、この先も、長いお付き合いをよろしくお願いします。

高田真宗学院に通って

第六組等正寺　**稲清水一美**

二〇〇八年四月に高田真宗学院に入学し、三月に卒業を迎えることになりました。

三年間はあっという間に過ぎてしまい、今になってからもっと真面目に授業を受けていれば良かったという思いもあります。

学院では、当番がくると感話をしなければなりません。私は人前で話すこと、自分の思いをうまくまとめることがとても苦手なので、感話はとても嫌でした。

前期、後期の二回の修練は、日常生活から離れ、テレビや携帯電話のない中で、一つのことに集中できるということが、普段の生活ではなかなか時間がとれないということもあり、私にはとてもありがたいことでした。

前期は名古屋、金沢の真宗学院生、後期は大谷専修学院生と一緒になりました。年齢、環境、考え方の違う人達と話しているうちに今私が抱えている問題に気付くことができたと思います。

最後に、八期生の皆さん、先生方に助けていただき、楽しい三年間でした。夕方家をあけなければならず家族にもたくさん迷惑をかけてしまいました。これからは月忌参りの中で、いろいろな方々と話をする機会をもちたいと思います。

どうもありがとうございました。

愚僧のつぶやき

〈お内仏の荘厳編 ⑤〉

前回は鶴亀の燭台のお心を頂いた事ですが、今回はその鶴亀に立てますお蝋燭を見てゆきたいと思います。現在大谷派では、イカリ型の和蝋燭を正式とし、法要の軽重や種類に応じて、金、銀、朱、白の四種類が定められています。

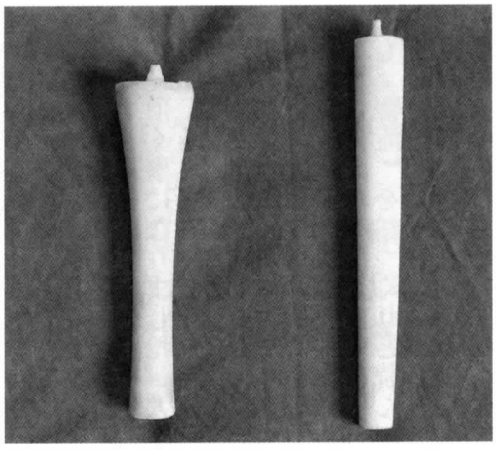
お蝋燭には和蝋燭と洋蝋燭があり、和蝋燭には棒形とイカリ型の二種類があります。中国で作られた和蝋燭は、奈良時代には日本へ伝えられた様ですが、非常に貴重で高価な為、一般に普及されたのは江戸時代以降といわれています。

本願寺においても、和蝋燭は古くから仏前荘厳として使用されてきました。決して裕福でなかった頃から、本願寺は高価な蝋燭で仏前を荘厳してきたのです。そこには、仏前のお光とは単なる照明ではなく、我々の心の闇を照らし、この身このままを包んで下さる仏さまのお心を表わす尊いお光として仰いできたという事があった訳です。だから消火の時は口で吹き消さず、蝋燭の芯を香箸（真鍮の火箸）で、はさみ切って消すのが心得となっています。

明治時代に入ると、光度も明るく扱いも簡便な洋蝋燭が機械化で大量生産され、一気に普及する事となります。それでも仏前には和蝋燭が好まれてきた理由を和蝋燭屋さんに尋ねた所、「以前の洋蝋燭は原料に鯨の脂を使用しており、仏前に動物性のものはふさわしくないので、和紙と藺草（いぐさ）で出来た芯に櫨（はぜ）の実の脂をかけて作る植物性の和蝋燭が好まれた。」という話しでした。ただ現在は、鯨の代わりに石油からとれるパラフィンというものを原料としているので、仏前に洋蝋燭でも良いのかと尋ねたところ、「いやダメだ。パラフィンから出るススが漆や金箔に付くと取りづらいので、仏具に優しい和蝋燭が良いのだ。」と。まぁ、これは和蝋燭屋さんの話しですので、今度は洋蝋燭屋さんの話しも聞いて来ようと思っています。

又、もう一つ忘れてはいけないものに、木製で作られた木蝋があります。これは、立燭しない時に常に鶴亀に立てておくものです。もともとは、蝋燭が高価な為に平生の経費削減を目的として作られたものの様ですが、先達の方々はこの木蝋を見るにつけ、いついかなる時でも我々を照らし、救済しようとはたらき続けて下さっている仏様を思い、その有難さに手を合わせ、お念仏申してきたという事であります。

（ペンネーム　維摩教信）



形の種類

イカリ形　棒形

完納御礼

二〇一〇年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、年末完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第1組
雲晴寺

第2組
乗雲寺　恩敬寺　寶善寺

第3組
明了寺　禮信寺　淨念寺

第4組
西勝寺　常見寺　慈圓寺　養性寺
當正寺　正行寺　隨念寺　持專寺
淨善寺　敬音寺

第5組
西榮寺　覺真寺

第6組
常敬寺　本淨寺　安傳寺　長圓寺

第7組
妙行寺　速念寺　專念寺　淨善寺
本覺寺

第8組
圓性寺　明岸寺　勝名寺　蓮淨寺
本覺坊　源長寺

第11組
寶惠寺　友岸寺　添景寺　法善寺

真養寺
第12組
専徳寺　法西寺　善徳寺　光善寺
光圓寺　教念寺　西忍寺　性徳寺
敬泉寺　徳生寺　敬徳寺
第13組
榮恩寺　龍覺寺（頸城）　福淨寺　了蓮寺
正行寺（大潟）　本善寺　啓明寺　願念寺
（二〇一〇年十月十三日～
二〇一一年一月二十日）
以上六十一ヵ寺

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌御修復懇志金御依頼額を完納いただき誠にありがとうございました。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第6組
長圓寺
第7組
速念寺
第8組
常光寺
第13組
了蓮寺
（二〇一〇年十一月一日
～二〇一一年二月二十八日）
以上三ヵ寺

●おくやみ申しあげます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第4組　西勝寺前坊守　江口　朝子
第5組　聽信寺前住職　居多　凱
第7組　願生寺前住職　平出　正栄
第7組　淨善寺住職　飯沼　真教
第8組　正福寺前坊守　大舘　マサ
第11組　光圓寺坊守　竹内　ヨキ

●おめでとうございます

◎得度式受式
第1組　光照寺　梅澤　謙吾
第7組　西谷寺　親跡　貴徳
第11組　高源寺　春日智惠子

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

『響流』編集委員就任のご挨拶

第五組林正寺　**古海　景雲**

今号より、大道智紘さんに替わりまして、高田教区報『響流』編集委員を務めさせて頂く事になりました。人生経験も、また、真宗僧侶としての経験も浅い若輩者でございます。これまでの私は、聞思学場の研修生意見発表の寄稿こそありましたが、お世辞にも『響流』をじっくりと読んでいたとは言えません。そんな私にこの任が務まるのかとの不安もあります。この度、編集委員の任に当たる事により、文字通りに「響流」の隅から隅まで熟読する事になりました。これもまた、一つの縁だと思います。委員会の諸先輩方の足を引っ張る事の無い様、精一杯任に当たらせて頂きたいと思います。

さて、未曾有の大災害に見舞われ、多くの方々が、苦難の生活を強いられている今、教区報として、『響流』に何が求められているのか。常に考え、精進していきたいと思います。

皆様方のご指導・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

◆こもれび◆

三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震によって罹災され、避難生活を余儀なくされている方々にお見舞い申し上げ、建物の倒壊や大津波によって尊い命を奪われた方々に衷心より哀悼の意を表します。

今回の震災では津波によって広範囲に、そしてあってはならない原発事故へ被害が及びました。この状況を憂いた「天罰」発言が、配慮が足りなかったと批判を受けています。被災された方たちのことを思えば、不適切であったとは思います。しかし、便利で快適な生活を追求することが当たり前となっている今、贅沢という意識が薄れ、エコという名のもとに行われる無駄遣いの正当化が電力不足を引き起こし、「原発」という自然をかえりみない事象を推進する原動力となっている気がします。

放射能とともに生きる覚悟があれば別ですが、そうでなければもう少し自分の足元を見直す必要があるのではないでしょうか。

なお、編集にあたり原稿依頼当初と状況が変わり、割愛または変更させていただいた原稿がありますことをお断りさせていただきます。（岡寺）